

近世の高僧伝と明恵上人伝記

—『本朝高僧伝』巻第十四 城州高山寺沙門高弁伝—

野村卓美

一 はじめに

明恵（一一七三—一二三二）の伝記が行状系・伝記系の二系統に分類出来ることは田中久夫^①、奥田勲^②両氏により、詳細に論じられている。『仮名行状』・『漢文行状』と略称される『高山寺明恵上人行状』が行状系を代表する作品である。両行状の成立過程には不明な部分も残されているが、明恵歿（貞永元年正月十九日）後に、高弟義林房喜海（一一七四—一二五〇）によって伝記「義林房喜海和字之記録」（原「仮名行状」か）の編纂が開始され、喜海の歿後、依頼を受けた仁和寺理智院隆澄（一一八九—一二六四）がそれを漢文化し、更に高信（一二九三—一二六四）が加筆し、建長七年（一二五五）七月八日に完成させたのが『漢文行状』である。このこ

とは高信が記す『漢文行状』（上山本）巻下の奥書（32張）に明記されている。

一方、ほぼ年代順に記されている行状系とは異なり、明恵に関する説話を語ることに重点がおかれている伝記系の作品がある。その多くは『梅（梅）尾明恵上人伝記』と題されており、行状系には見出せない逸話も含まれており、その中には、疑問視される説話や、史実を確認することが困難な事柄もある。

田中氏は「伝記」は、南北朝以後かなり流布し、「明恵は禅林の間で人気があり、仮託された作品（『達磨講式』の如き）も出来た」（補注（一））とする。また、奥田も、殆ど流布することがなかった行状系に比べて、

「伝記」系は、鎌倉時代・室町時代を通じて広く読まれ、江戸時代に版行されるに及んで更に多くの読

者を獲得し、明恵上人像の形成によかれあしかれ大きな役割を果たしてゐる点でも等閑に附することは出来な^いし、むしろその面からも積極的な評価が必要なのではあるまいか。

(補注(2))

と、伝記系の諸作品、特に大量に印刷・刊行された本が、近世以降の明恵像形成に果たした役割の重要性を指摘している。

平野多恵氏の調査によると、現存する行状系の本の少なさに比して、伝記系の写本は、残欠を含むと、二十六本以上が報告されている。³⁾このことも、伝記系の作品が明恵像の形成に多大な影響を与えていたことを如実に語っている。江戸期になると、「梅尾明恵上人伝記」(以下。「版本」と略記)二巻も刊行された。「版本」には、寛文五年(一六六五)版、宝永六年(一七〇九)版、寛政三年(一七九一年)版、刊行年不明の版があるが、「寛政三年版を除き」「すべて同版」⁴⁾である。

先学の指摘を参照すると、江戸以降における明恵伝記は伝記系、特に「版本」の影響を強く受けていたと考えられる。しかし、管見の及んだ限りではあるが、具体的

にそれが論じられたことはなかったようである。本稿では、『本朝高僧伝』巻第十四 城州高山寺沙門高弁伝を中心に、江戸時代における明恵伝記受容の一端を検討してみたい。

二 「本朝高僧伝」の編纂態度

『本朝高僧伝』は正元師蛮(一六二六—一七一〇)により元禄十五年(一七〇二)に撰述され、宝永四年(一七〇七)に刊行された。現在も、「本朝高僧伝中最も完備せるもの」(『佛書解説大辞典』)、「日本仏教史研究の基本的文献の一つ」(『岩波 仏教辞典』)と高く評価されている。

「本朝高僧伝序」には、

欽明御^レ録一千二百余載。間有^二述者。而非^二通伝。元亨年中。東福虎関和尚著^二釈書三十卷。僧員不^レ盈五百。漏^レ網尚多。余嘗志^二于茲。二都辺陲。遙皇周流。冒^レ險挈^レ包搜訪者特尚矣。隻字片言。無^レ不^二收拾之。禪録教策。王庫之史。公府之乘。釈志

神書。以至「雜記稗説」。蠹簡零篇積埒如^レ岡。遂循^二古伝之十科。訂稽編類。遠從^二上世^一迄^二于^三昭代^一。班^二一千六百六十二人^一。釐成^二七十五卷^一。別附^二總目^一。曰^二本朝高僧伝^一。

〔大仏全〕一〇四・四九頁上

とある。『元亨釈書』が五百人の僧伝しか記すことがなく、その多くを書き漏らしており、それを補ったこと、僧伝編纂の志を立てて以来、夥しい数の文献類を博搜したこと、「一千六百六十二人」もの僧伝を纏めたこと等が記されている。

師蛮が、「禪録教策。王庫之史。公府之乗。釈志神書。以至「雜記稗説」。蠹簡零篇積埒如^レ岡。」と自負する如く、僧伝に関する資料を博搜し、それらを細部まで披見している。そのことは、今から論じる、城州高山寺沙門高弁伝（以下、「高弁伝」と略記）も同様である。そこには、「高山寺明恵上人行状二卷」・「高山寺縁起」・「古今著聞集第二」・「三國仏法伝通縁起卷中」・「円照上人行状卷上」・「沙石集第三」・「春日権現験記第十七」・「塵添瑿囊鈔第一第四第十二」・「元亨釈書第五」・「真言伝第七」・「一代

要記第八」・「扶桑隱逸伝卷下」・「東国高僧伝第八」・「高野春秋編年輯録第八」・「如是院年代記」と十五もの参考文献が列挙され、関連記事が見出せる巻数までも詳細に記されていることからわかる。また、「凡例」が記す「拾^二蠹咬鼠嚼之余^一。」という、言葉からも編纂に対する熱情を感じ取ることが出来る。

しかし、列挙されている文献全てが明恵伝を詳述しているわけではない。例えば、『二代要記』には「貞永元年壬辰」正月十九日、梅尾高弁上人入滅、年六十、また、『如是院年代記』にも「貞永元」正月十九日高弁寂」と記されているのみである。このような僅かな記事にも師蛮は目を通していたことがわかる。

以下、『本朝高僧伝』高弁伝（『大日全』一〇四・二一七頁上〜二一九頁下）を中心に、師蛮が参照したと推察される文献を中心に検討してみたい。

三 師蛮の参照した文献―『元亨釈書』と『版本』―

『本朝高僧伝』高弁伝を一読して理解されることは、

冒頭部と入滅に関する記述が『元亨釈書』に近似していること、また、記されている説話が、行状系には見出せないものもあるが、その殆どが伝記系には存しているということである。

『元亨釈書』は僧伝の基本的文献の一つとして重視されて来た。例えば、江戸期の僧伝『扶桑隱逸伝』（寛文四年刊行）明慧・『東国高僧伝』（貞享四年（一六八七）著）洛西高山寺高弁伝も、多く同書が参照されている。特に、後者は『元亨釈書』のみを参照して構成されている。高弁伝冒頭の参考文献目録にも『元亨釈書卷五』とある。師蛮は同書を凌駕する僧伝の編纂を企図すると同時に、同書を座右に置き、常に参照していたことは、他の僧伝にも同書が参考文献中に頻出していることから推察される。

参考文献冒頭の、「高山寺明恵上人行状二卷」について、少し検討してみたい。奥田氏は、「高山寺」と寺名でいふのは、「梅尾」といふより数段格式ばった云ひ方なのであらう」（補注（2））と指摘する。現存している伝記文献は、「高山寺」と付される本の多くが行状系であり、

「梅（梅）尾」で始まる本は、概ね伝記系である。また、師蛮は「二卷」と記しているが、『仮名行状』（中巻が散逸しているが）・『漢文行状』は上・中・下の三巻で、伝記系の多くは上・下の二巻である。しかし、伝記系の興福寺藏「梅尾明恵上人伝」（以下、「興福寺本」と略記）尾題には「明恵上人形常記上」（36ウ）とあり、伝記系でありながら、「形常記」（「行状記」と称されていた可能性があり、書名のみでは行状系・伝記系を連断する）とは出来ないようである。

前述した如く、師蛮が記している殆どの説話は伝記系に見出せ、しかも、その記述内容も「版本」を逸脱してはいない（後述）。故に、「高山寺明恵上人行状」とは記されているが、巻数や前述したことからも、「版本」と断じて誤りはないであろう。

以下、師蛮が『元亨釈書』を主に参照しながら、「版本」等を適宜援用し、明恵伝記を編纂している様子を概観してみる。

冒頭から「十九從二小野興然阿闍梨。稟二阿部密灌。」までは、主に、『元亨釈書』を参照していると思われる。

しかし、同書のみでは補えない記述も見出せる。微細な記述ではあるが、例えば、伝記の冒頭を師蛭は、

釈高弁。号明慧。父平重国。紀州在田郡人。母藤氏。

無嗣祈仏。

と記す。ここに該当する箇所は「元亨釈書」では、

釈高弁。姓平氏。紀州在田郡人。父重国嘗為嘉応

帝衛兵曹。二親各詣仏祠求子。

とある。この記述を参照したとすると、母の姓を他書で補う必要がある。因みに、「元亨釈書」のみを参照した「東国高僧伝」(「大仏全」一〇四・一〇六下〜八上)は、「出紀州官族平氏。父重国。母某氏。」と、母親の姓を「某氏」と記している。師蛭が示す参考文献中で、それを明記しているのは、「版本」以外にはないようである。「版本」巻上の冒頭には、「母は藤原宗重が女也」(一〇五頁)とある。「元亨釈書」に拠りながらも、他本も参照して編纂していたことがわかる。

解脱房貞慶(一一五五〜一二二三。以下、「貞慶」と記す)説話と、明恵のそれが「混淆」しているとの指摘が浅野祥子氏によりなされているが、次の例もその一つと言え

るのではなからうか。

行状系では、上人の母の妹が、「大柑二果」(「仮名行状」上・2オ)を姉に奪われるという夢を見るが、これが明恵懐妊の奇瑞とされている。しかし、伝記系では、「金果一顆」(「版本」巻上・一〇五頁)と柑橘の数が改変されている。⁽⁶⁾「元亨釈書」は、「妹曰。我又夢。人与我大柑二顆。姉曰。我当得便被奪。」とあり、行状系に近似する。⁽⁷⁾この逸話を師蛭は、

母藤氏。無嗣祈仏。夢人与金橘入懐有妊。

と、妹が省略され、母が夢中で得た橘(個数も省略)を「懐」に入れたと改めている。この逸話は、「元亨釈書」が記す貞慶の誕生の奇瑞、

母夢。高僧来宅。自称曰貞慶。言已入懐。自是而孕。
(卷第五)

と近似しているのではなからうか。「橘」と「高僧」との相違はあるが、共に、母親が「夢」で「懐」に入ると見、「懐妊」するという奇瑞譚である。「本朝高僧伝」城州笠置寺沙門貞慶伝にも、「母夢。一高僧自称貞慶。入其懐。從茲有孕。」(「大仏全」一〇二・二〇八頁上〜下)

とあり、『元亨釈書』を参照していることが明らかである。高弁伝も師蛮による同書の影響による改変かと推察される。

しかし、「版本」には、

(母) 夢に人來りて、金果一顆を与ふ。是を取りて懐に入ると見る。其の後幾ならずして懐妊す。

(卷上・一〇五頁)

とあり、『元亨釈書』よりも、この記述を参照したと考えるべきであろう。

「伝記系諸本の中でも最も古い時代の書写本」(補注(2))である「興福寺本」に、

承安元年孟夏上旬比也、堂前座眠夢人來金菓一顆与是被懐入見、其後不幾懐妊、

(2才)

とあり、「諸写本のうちでも最古態を保つ草稿本的性格を持つ伝本」である、貞治三年(一一三六四)書写の慶應義塾図書館蔵「梅尾明恵上人伝 上」(補注(3))にも、
爰承安元年孟夏上旬比、座仏前ネフル夢人來金菓一顆アタフ。是取□□リテフトコロ入ミル。其後イクハクアラスシテ懐妊。

(1ウ)

とある。両上人の懐妊譚は早い時期から「混淆」していたと考えられる。

次に、師蛮は、

八歳父母相繼背喪。上高尾山。師事伯叔上覚。讀華嚴五教章俱舍頌。裁歴旬浹。皆能闡誦。

と記しているが、『元亨釈書』には、

九歳父母繼亡。離宅從高尾山上覚。讀俱舍頌。

不旬日便能誦。

と、記されている箇所について検討してみたい。前者が後者の記述を参照していることは、その表現の近似性からも推察出来る。しかし、父母が歿した年齢と、『華嚴五教章』を受学した師と時期も異なっている。

先ず、両親の歿年から検討してみたい。「仮名行状」上には、

(父重国は) 治承四年(庚子) 九月、源平乱始、上総国シテ源氏タメ誅セラレ畢、母湯浅権守藤原宗重 第四女、次年春正月八日入滅、

(1才)

とあり、父親は治承四年(一一八〇)明恵八歳) 九月、母親は翌年正月八日に歿したとする。しかし、『漢文行状』

巻上は、

治承四年（庚子）正月八日悲母逝去、同年九月親父
夭亡、
（3張）

と、師蛮と同様に、八歳の時に両親を喪つたとする。行状系で異なつた記述が見られる。明恵の同法禪淨房（伝未詳）が「明恵から聞書きし」、寛喜元年（一一二九）ころに成立したと推察される「上人之事」（補注（2））も、同様のことが記されており（5才）、両親の歿年は明恵八歳の時の、治承四年とされている（補注（1））。『仮名行状』の記述は、漢訳される際に改められたのであろうか。

『漢文行状』を参照した虎関が、「九歳父母継亡」と記した根拠は不明であるが、高雄に登つた年を念頭に置いて記述した故の誤記とも推察される。両親の歿年については、「版本」巻上、冒頭に、

治承四年（庚子）正月、母におくれ、同九月、父におくれたり。
（二〇五頁）

とあり、伝記系を参照して記すことが出来た事柄である（『興福寺本』・2才にも）。

次に、『華嚴五教章』を伝授した師について検討してみたい。「元亨釈書」には、「習ニ雜華於景雅。」とあるのみだが、これは、『漢文行状』巻上の、「隨テ華嚴院法橋景雅・習ス華嚴五教章ナリ」（4張）の抄出であろう。共に、景雅が華嚴学の師であつたとある。師蛮も『本朝高僧伝』巻第十二 播州性海寺沙門如幻伝の中に、「釈景雅」の略伝を記しており、「高弁」が「出自ニ其門。」と、その師弟関係を明記している。しかし、高弁伝では、先に、示した如く、『華嚴五教章』と『俱舍頌（8）』は上覚から学んだことになっている。では、何故このような誤記が生じたのであろうか。師蛮はこの記述に関しては、主に、「版本」を参照したのではなからうか。「版本」巻上によると、「九歳」で「高雄山」に登り、「則ち華嚴五教章、又悉曇等を受學す」（二〇七〜八頁）とあるが、上覚・景雅の名前は記されていない。（『興福寺本』・3才〜4才も同）。「版本」では明恵の最初の学問が『華嚴五教章』となる。

先述した如く、師蛮は明恵の華嚴の師が景雅であるとの資料は有していたが、それを明恵伝記を記す際に活用

することなく、「版本」の記述のみを参照したと考えられる。

続いて、明恵の学問の師に関する記述について検討してみたい。「版本」巻上では、学問を始めた時期の師としては、「賢如房の律師尊印」(一〇八頁)。「仮名行状」上・9ウにも)の名前が記されているのみである。しかし、「元亨釈書」には、

十許歳。早事_二游学。聞_二密乗於尊実。習_二雜華於景雅。有_二尊印者。善_二悉曇章。

また、

十六就_二上覚_一剃落。於_二東大寺戒壇_一受具。寺有_二聖詮者。善_二賢首宗。請益日新。

とある。師蛮は、

十歳_(群衆カ)游学。聞_二密乗於醜_(醜)剃_(剃)劇_(劇)。習_二華嚴於南都景雅。又就_二尊印_一学_二悉曇章。

また、

十六就_二上覚_一剃髮。受_二品具於東大寺戒壇。謁_二尊勝院聖詮。詮者景雅神足。精_二于雜華。弁听昏請益。

深究_二卍理。

とあり、「元亨釈書」を参照したと推察される。しかし、波線部の如く、師僧の所屬と師弟關係が付加されている。以下、波線部の記述について少し、検討してみたい。

虎関が参照した「漢文行状」巻上には、

十余歳以後屢訪_テ縁学_ヲ諸師_ヲ。欲_ス習_ム 顯密_ノ法門_ヲ。遇_テ惠鏡房_ノ法橋尊実_ニ。受_ス学_ス弘法大師製作_ヲ。隨_テ華嚴院法橋景雅_ニ。習_ス学_ス華嚴五教章_一。又就_テ賢如房律師尊印_ニ。受_ス悉曇字_(五)紀等_一。(4~5張)

文治四年(戊申)生年十六歳、隨_テ上覚上人_ニ出家於東大寺戒壇院_ニ。受_ス具足戒_ヲ。又就_テ東大寺華嚴宗林觀房_ニ。法眼聖詮_ニ。受_ス学_ス俱舍_一。(7張)

とある。また、「仮名行状」上には、「仁和寺土橋惠鏡房法橋尊実」(9オ)、「東大寺尊勝院華嚴宗林觀房法眼聖詮」(15オ)と、尊実と聖詮にはその所屬寺院名が記されている。師蛮は行状系の文献は「元亨釈書」を参照したのみで、「仮名行状」・「漢文行状」は手にしていなかったと考えられる。では、如何にして師蛮は師僧の所屬を知ることが出来たのであろうか。

先ず、師蛮が「実尊」、師蛮以外は尊実と記す僧侶に

ついで検討する。「実尊」は師蛮も「本朝高僧伝」巻第十四に記している如く、興福寺別当円信の弟子で、松殿基房息実尊（一一八〇～一二三六）が著名である。しかし、師蛮は実尊伝を『本朝高僧伝』に載せていない。以下、論じることからも「実尊」は尊実の誤記と推察される。「血脈類集記」第七 裏書「尊実事」には「寛有阿闍梨入壇資。号_三惠鏡房法橋_三。文治五年四月二十五日卒（八十四）」とあり、「実尊」は師蛮の誤記、もしくは印刷の際の誤植と推察される。明恵十歳の寿永元年（養和二年。一一八二年）は尊実は八十一歳の高齢であったことがわかる。彼の名前は、行状系・伝記系共に見出せる（行状系が詳述している）が、十三歳の時、夢にこの尊実に灌頂を受けたと見た（『仮名行状』上・13ウ～14オ。『漢文行状』巻上・6～7張。『版本』巻上・一一〇頁）。明恵十三歳は文治五年（一一八九）であり、『血脈類集記』の記述に随うと、尊実が八十四歳で歿した年でもある。老師の入滅が明恵の見た夢に強い影響を与えていたのであらうか。

また、「醍醐寺を中心とする真言の血脈」を集めた醍

醐寺蔵本「伝法灌頂師資相承血脈^⑨」によると、実任から血脈を授けられた僧侶に「尊実」がいる、この尊実が論じている僧侶であらうか。以上のことから、東密の僧である尊実は仁和寺・醍醐寺等の寺院を中心に活躍していたと考えられる。師蛮には「実尊」（尊実の誤り）が醍醐寺の僧侶との資料は有していたと判断される。

景雅の所屬を「元亨釈書」は記していないが、前述した如く、『漢文行状』巻上には「華嚴院」とある。先に指摘した、『本朝高僧伝』巻第十二 如幻伝に付された景雅伝では、「仁和寺諸院家記」と「法然上人伝記」を参照したことが記されている。「仁和寺諸院家記」（恵山書写本）上 華嚴院の冒頭に「景雅法橋」とあることからも、仁和寺華嚴院に住していたことが確認出来る。では、何故、師蛮は「南都景雅」と改めたのであろうか。彼も参考文献としてその名を記している『三国仏法伝通縁起』巻中 華嚴宗 の項には、

光智大徳始建_三尊勝院_三為_三永代華嚴弘通本処_三。（略）
有_三良覚大法師_三。覚公門人有_三如幻_三。景雅両哲_三。（略）
景雅法橋門人有_三高弁大徳_三。

〔大仏全〕一〇一・一一八頁下)

とあり、景雅は東大寺尊勝院で学んだ僧侶であったことがわかる。師蛮が「南都」と記した根拠はこのような資料に拠っていたのであろう。

聖詮については、「吉記」治承五年(一一八二)五月廿九日の記事に「聖詮、(廿)」とある。東大寺の僧侶であるこの人物が、明恵の師聖詮であらう。また、「華嚴血脈」によると、良覚に如幻・景雅が、景雅が慶秀・聖詮・高弁に血脈を授けている。景雅と聖詮の師弟関係はこのような血脈等で確認したのであろうか。聖詮は華嚴学を明恵に伝えた東大寺の僧侶である。

以上、師蛮は明恵の師について、自ら調査した事柄を加えている。このことから、座右に幾つかの相承血脈類を有していたと推察される。

師蛮が「元亨釈書」を参照していると推察される箇所のもう一つは、伝記の最後である。寛喜三年十月より明恵は体調不良となる。そして、翌年

四年正月十五日夜。对弥勒像端坐入観。口放白光。移時出定。告門人曰。吾行期近矣。因言

臨終法儀

と、寛喜四年(貞永元年)正月十五日の記事を載せている。伝記系の写本の幾つかは上巻のみで、下巻を欠落させている。「興福寺本」も同様である。「版本」には正月十五日の記事はなく、「或る時」のこととして、「弥勒」の「宝珠の上より香煙忽ちに立ち昇り、

上人の御口の中より白光出でて、弥勒の宝前を照らし給ふ。(巻下・一九六頁)

と、近似の記述が見出せるのみである。しかし、「元亨釈書」には、

寛喜四年正月十五日夜。对弥勒像禅坐入観。傍人看之如無氣息。於時尊像宝座左角宝珠忽出香煙。漸上如雲。其像譬若在雲中。於是弁又口中放白光。移時刻出定。告諸徒曰。我期已近。便宣臨終法儀。

とある。虎関は「漢文行状」巻下の同日の記述(24張)を抄出しているが、「告諸徒曰。我期已近。便宣臨終法儀。」に該当する記述は見出せない。それは、「漢文行状」巻下に「同十八日辰時、上人云、今其期已近。」上

人告云、(略)入滅儀可為此定、(27張)とある記述を参照していると考えられる。即ち、虎関は十八日の記事も十五日に入れ込んで記している。師蛮も「告門人曰。吾行期近矣。因言臨終法儀。」と記していることは、「元亨釈書」を参照したことを明確に示している。

師蛮は、主に「元亨釈書」を参照して構成していると推察される箇所に関しても、そのみから抄出するのはなく、他の文献も適宜参照している。それらの中で、明恵の生涯を詳述する唯一の本である「版本」は、最も重要な参考文献であったことがわかる。

四 「版本」と「本朝高僧伝」

師蛮は、冒頭から十九歳で興然阿闍梨から両部密灌を稟ける記事までは、主に「元亨釈書」に拠っていた。それ以後は、「版本」を中心に、年次を無視して記している。例えば、先に引用した興然阿闍梨の記事に続いて、

A 止_三梅尾山。

B 又登_三紀州白峯山。菴居修観。依_レ不_二火食。患

痢数日。夢神僧与_三杯羹。寤後余甘猶在。即時疾癒。

C 一時久旱。弁作_三龍。修_三大仏頂法加_三持香水。登_レ山灑下。即雨三日矣。

D 文覚法師常語_レ人曰。鷲子目連是証果人。三学之功我難_三得擬。然至_三心法了達潔白。争若_三明慧_一乎。

E 建久之季。招住_三梅尾山。四衆帰_レ徳。於_レ是講_三探玄記。梵網経等_一。

とある。A-Eは連続する記述ではあるが、検討のために仮に記号を付した。

Aは明恵が梅尾に高山寺を建立し、止住したとの意であろうか。しかし、「版本」巻上も記す如く、

建永元年(丙寅)十一月、後鳥羽院より院宣を成し下されて、高雄の一院梅尾を給はりぬ。此処を華嚴宗興隆の勝地と定む。仍りて高山寺と号す。

(一三七頁)

とあるように、明恵が梅尾に定住したのは、建永元年(一二〇六。明恵三十四歳)十一月に後鳥羽院より梅尾

の地を賜つて以後である（『漢文行状』巻中・31張にも）。
行状系・伝記系共に記すことではあるが、明恵が建久末
年に白上の草庵を出て上洛し、高尾に還住した折りに、
文覚より梅尾に運慶の釈迦如来像を付属する故、それを
安置して華嚴を興隆することを依頼された（『版本』巻上・
一一八頁。『漢文行状』巻上・正22張）。この時に梅尾に
草庵が完成したか否かは明記されていないが、建久九年
秋末には紀州筏立に移住しており、この時より梅尾に止
まったという表現は正確ではない。あるいは先に指摘し
た『元亨釈書』の興然阿闍梨に両部の密法を稟けたと言
う記述に続いて、

自爾止^す北山梅尾^す盛唱^す賢首宗^す。

とあるのを、そのまま踏まえているのであろうか。

Bは紀州白上での修行中に、右耳を切断し、文殊師利
菩薩が顕現したときの一連の奇瑞を語る記事の中の一節
である。例えば、「版本」巻上には、

此の草庵に数月を送りて爛^{あたたか}なる食事なし。又、塩膾
の類も遙かに遠ざかる。有待の身なれば、四大乖違
して、白痢の如くなる物下りて数日を経る間、〈略〉

爰^{こゝ}に或る夜の夢の中に、一人の梵僧来りて、白器に
熱湯の如くなる物一杯盛りて、是を服すべしとて授
け給へり。〈略〉即時に快くして、其の病氣日を追
ひて平癒せり。（一一七頁）

とある箇所を抄出したと考えられる。

Cは、行状系では、『漢文行状』巻中の元久年間
（一一〇四〜〇六）の大旱魃の際に明恵が二籠を図し、
それらを加持し、三日間別訳華嚴世主妙嚴品を転読した
こと（12張）を抄出したと推察されるが、期日は明示さ
れていない。「版本」巻上にも、日付はないが、承元四
年（一一二〇）七月に『金師子章光顯抄』を書いたこと、
それに伴う奇瑞を記した後に、

上人紀州に栖み給ひける夏、八十余日に及ぶまで大
旱魃しけり。〈略〉試みに大仏頂の法を修し給ふ。
手づから自ら二竜を図して、〈略〉亦彼の法に依り
て加持して、高山の峯に登りて是を濯き給ふに、〈略〉
大雨降ること三日也。（一一三九頁）

とある。この記述の抄出であろう。

Dは、文覚が舍利弗・目連と明恵を比較して述べた発

言である。行状系には見出せない。この記事も、「版本」巻上に、文覚の発言として、

在世の舍利弗・目連等は証果の聖者なれば、三昧解
脱戒、定恵の徳はさる事にて、心の仏法におきて潔
くけだかく優しき事は、明恵房の心緒こころばへに過ぎては、
いかに御坐しけんとも覚えず。 (二二四頁)
とある。これを参照したと考えられる。

Eの記事の一部は、「版本」巻上の「建久四年」(二二二頁)から「建久九年」(二二二頁)の間の逸話として見出せる。文覚が所勞と聞き、明恵が高雄へ赴いた折りに、師から帰参するように云われたとの記事に続いて、

暫しと思ひて住する所に、衆僧こぞ奉りて所望の間、辞
するに処無くて、探玄記を講ずと云々。(一一八頁)
とある部分を参照したのであろう。この記事は、行状系にも見出せる(「仮名行状」上、51ウ。「漢文行状」巻上、正22張)。

しかし、行状系・伝記系共にこの折りに梅尾で「探玄記」と同時に「梵網經」が講じられたことは記されていない。師蛮は「梵網經」については、後に「於石水院」講梵

網經。梵僧列座。」と再度言及している。これは「版本」巻上の、

承久二年之比、石水院にして重ねて菩薩戒を興行し
て、香象の梵網の疏を談ず。 (一四二頁)
を踏まえていると考えられる。師蛮が明恵と「梵網經」との関係を強調するのは、若い時期から明恵が持戒堅固であったことを印象付ける意図が存していたからではなからうか。

以上、指摘した如く、説話の多くを「版本」に拠りながら構成していることがわかる。また、後に続く栄西・建礼門院・泰時・義景等に関する説話も伝記系のみに見られるものである。前述した如く、「版本」は高弁伝を編纂する師蛮が最も依拠した本であった。

五 師蛮の明恵伝記の編纂態度

師蛮は「高弁伝」を編纂するために「版本」を頻用している。その殆どが、抄出であるが、少し記述を膨らませた箇所もある。

四歳の時、父親が「形美麗」故に、「御所」(「仮名行状」

は「小松内府(平重国)」「上・4才)に参らせようと話したことを聞き、「片輪づきて法師に成されん」と思い、

縁側から落ちた。その時は、「人見付けて懐き取」った。

また、火箸を焼いて顔に当てようとしたが、恐ろしくて、

左臂に当てた(巻上・一〇六頁)。縁側から落ちたときは、

人が抱き留めたが、火箸を腕に当てた時は傍らの人の対応が、

行状系・伝記系共に記されていない。これは、「元

享釈書」も同様である。しかし、「本朝高僧伝」では、

自墜_三垂堂。家人走救。復欲_下以_三火筋_一通紅創_上面。

試擬_二左臂_一。傍人止_レ之。

と、波線部が付加されている。二つの行動の表現の形式を整えるために、書き加えられたのであろう。

しかし、このような例は珍しく、その殆どは、主に「版本」を抄出している。そんな中には、余りにも、抄出が

極端なために、異なった逸話となったものもある。例えば、

ば、

又見_下文殊乘_二金毛獅子_一。現_二於空中_一。光明赫奕_上。侍

僧皆見。弁謂_レ徒曰。不_レ為_二奇特_一。不_レ為_二殊勝_一。

如説修法。汝亦如_レ斯。

とある。これは、金毛獅子に乗じた文殊を明恵が見た、それを侍僧も見ていた。そこで明恵は弟子に向かい、特別なことではない、如説に修法すれば、斯の如きことは

同法も可能なことだと論じたという記事である。しかし、

文殊の示現と、明恵が弟子に引用部の発言をなしたのは、

異なった時のことである。以下、「版本」巻上を中心に

検討してみる。

先ず、文殊の示現は、紀州白上峯での修行中に右耳を

切断した直後のことである。痛さに堪えながら、

声を励まして経を誦する処に、眼の上忽ちに光り耀

けり。目を挙げて見るに、虚空に浮かびて現に文殊

師利菩薩、身金色にして、金獅子に乗じて影向_上し給

へり。其の御長_上三尺許りなり。光明赫奕たり。

(一一六頁)

と、文殊が示現した。しかし、この現象については、同

法との対話は記されていない。

後半の明恵の発言は、「版本」巻上では、建久四年に

東大寺に公請された記事の直前に記されている。行状系

も同所に明恵の透視能力について触れているが、「版本」には幾つかの逸話と明恵の発言が加わっている（伝記系諸本も同）。明恵の透視力の故に、弟子達が日常の生活まで見通されているのではないかと憂慮した発言を聞いた折りに、

高弁が如くに定を好み、仏の教への如くに身を行じて見よかし。只今に、汝共も加様の事は有らざるぞ。（略）法の如く行ずる事の年積るまゝに、自然と知れずして具足せられたる也。（一一二頁）

と答えている。この箇所を要約したと考えられる。明恵の伝記を簡略化するために、極端な抄出を行い、また、記述順序を無視した結果として、直接関わらない二つの逸話を結びつけてしまった例である。

伝記系の本、勿論「版本」も同様であるが、編年体で構成されていない。更に、師蛮は「版本」の記事を前後させて抄出している。そのことは、前章で検討した、AとEの記事からもそれは窺える。師蛮は、僧侶個人の逸話を記すことが中心であり、内面的な成長の過程を記すとの意は、希薄であったのではなからうか。

また、逸話についても、文献を博搜しながらも扱った伝記資料の内容の当否を検討するという作業は殆どなされていない。

明恵歿年について、師蛮は、

（寛喜四年正月）十九日朝。広説「修学始卒。即唱

慈尊宝号。右脇而逝。微笑見_レ面。異香襲_レ人。春

秋六十。（_○ 円照上人行状作六十一）

と記す。「元亨釈書」・「版本」等に明恵の誕生は承安三年と記されており、寛喜四年歿であれば、六十歳であることは確認出来るが、敢えて、凝然著「東大寺円照上人行状」上に、

弁公後堀河天皇御宇季曆貞永元年壬辰入滅、春秋六十有一、

と、異説があることを紹介する。蒐集した資料から、六十一歳入滅は誤説であることは明確であるにも関わらず、それを記している。資料を博搜したことを誇示する意図が存したのであろうか。

次は、師蛮の資料蒐集が及ばなかった例である。

平皇后徳子（建礼門院）請_レ弁受_レ戒。乃在_二簾中_一

令^二弁坐^レ下。弁曰。持戒比丘不^レ拜^二神明。不^レ敬^二王臣。下坐説^レ法。則師資墮^レ罪。經有^二明文。須^レ請^二他人。將^二起出^レ宮。平后夔^レ簾趨出。悔謝延^二弁高座。稟戒益敬。

と、建礼門院（一一五―一二三）に授戒した時の逸話を記している。

伝記系の写本の中でも、明恵が授戒した人物については諸説がある。例えば、「興福寺本」は「乾冷門院」（30ウ）、高山寺藏慶長十四年書写本「梅尾明恵上人伝」は「乾礼門院」（37オ）、大倉精神文化研究所藏「明恵上人伝記」上（仁和寺A本）は「乾礼門院」（38ウ）、同「梅尾明恵上人伝記」（仁和寺B本）は「建礼門院」（43ウ）とある。また、高山寺藏「梅尾明恵上人物語」（41ウ）、法隆寺藏「明恵上人伝記」上（40ウ）、高野山親王院藏「明恵上人伝」本（50オ）、慶応義塾大学図書館藏「古文明恵上人伝記」（31ウ）には「式乾門院」とある。

歿年の如く、師蛮が異説を紹介していないのは、「版本」のみを参照していたことを語っている。師蛮は異説を紹介するのみで、豊富に有していた資料を駆使して、それ

を否定することはしない。諸本を蒐集することが重視されて、内容の検討は殆どなされていない。

六 文献目録に記されていない資料

荻須純道氏に、「本朝高僧伝」の「援引書目は実に六〇〇余种を数える」（『大日本仏教全書 解題』（鈴木学術財団）との調査がある。高弁伝も、師蛮が記す文献目録以外の典籍を参照していたことは前述したが、その他に、気付いた文献を二三指摘してみたい。

まず、先に引用した明恵入滅の記事の直前に、

F 弁与^二笠置貞慶。松尾勝月^一友善。月於^二松尾^一慶^二讚宝塔。弁為^二導師。

G 寛喜二年。後堀河帝詔^レ弁説法。講訖出^レ宮。中納言藤定家揖送曰。聴^二微妙説^一結縁感悅。其為^二時彦^一所^レ賞如^レ斯。

と、「版本」にはない記事が連続して記される。

Fの記事について、貞慶と明恵の關係は行状系・伝記系共に言及するが、勝月房慶政との關係は見出せな

い。しかし、定真が編纂した「最後臨終行儀事」には慶政の記事を見出すことが出来る。それは明恵臨終の寛喜四年正月十二日に、慶政から正月三日に天変が出現したとの知らせが届いたこと(9才)、明恵歿後三十五日の修善の導師が慶政であったこと(19才)である。「版本」からも、慶政が宝塔を供養した折りに、明恵が導師を勤めた記事は見出せない。これは「百鍊抄」安貞元年(一二二七)三月廿二、

○廿四日。松尾証月上人供養多宝塔。導師明恵上人。百僧供養云々。

とあることを踏まえて考えると考えられる。

Gは藤原定家(一一六二—一二四一)との関係を記している。行状系・伝記系共に定家との関係を指摘する記事はない。師蛮は寛喜二年(一二三〇)と年次を明記しており、定家の日記「明月記」を参照すべきであろう。すると同年正月十八日に、

明慧房被参、与大藏卿参南弘庇聴聞、適参会结缘、尤感悦、無程被出、予下地、其後於東庭御覽馬之間、与大府卿退出了、

とあり、この記事を踏まえて記されていることがわかる。次に、明恵の著作を列挙している。それを検討してみたい。それは、

H 為「民部卿藤長房」詮「釈金師子章」選「光顯鈔」二卷。其余述作。華嚴唯心義釋。華嚴修禪觀照入解脱門義各二卷。孟蘭盆經總釈。善知識。科文。功德義鈔。菩薩戒儀各一卷。摧邪輪三卷。菩提樹宝塔式四卷。凡有七十餘卷。其摧邪輪。博引「經論疏釈」。破「源空之選撰集」。

とある。

明恵の著述については、「上人所作目錄」(明恵上人資料 第五)(高山寺資料叢書 第二十冊)が最も信頼できるが、「善知識」を「善知識供式/同祭文」(二ウ)、または、「善財善知識念誦次第一帖」(三才)の略称としても、「科文」・「菩薩戒儀」卷・「菩提樹宝塔式四卷」の三書は同目錄から見出すことは出来ない。「科文」とは、「經典(經)、論書(論)を解釈するのに」「全体の構成を図で示」す等、工夫を加えたもの(岩波 仏教辞典)である。「菩薩戒儀」は「禪上房書籍缺目錄」(続高

山寺経藏古目録』（高山寺資料叢書 第二十二冊）第卅三箱に「121菩薩戒儀一卷（欠）」とあるが、明恵作か否かは記されていない。大正大学図書館には「明恵」著として、「菩薩戒儀」一冊が所蔵（『国書総目録』）されている（未見）。『仏書解説大辞典』にも。また、『増補諸宗章疏録』には、「梅尾高山寺明恵上人高弁撰集」として、「菩薩戒儀一卷」・「菩提樹宝式四卷」（『大佛全』一・一八頁下〜九頁上）が見られる。しかし、『増補諸宗章疏録』には「科文」が見出せず、その成立も「本朝高僧伝」成立以後である（『佛書解説大辞典』）。師蛮は明恵の著作目録を手元に有していたと推察されるが、それは、余り信頼出来るものではなかったようである。

七 おわりに

仁和寺理智院隆澄が喜海の依頼を受けて、明恵伝記を漢訳したことは、前述した如く、『漢文行状』奥書に記されている。その隆澄の伝記も「本朝高僧伝」巻第五十四に記されている。そこにも、参考文献として「東

寺長者補任第三」・「仁和寺諸院家記」・「血脈類集記第十一」が挙げられている。しかし、示した三書を師蛮は精査してはいない。その多くを、「東寺長者補任」に依拠しており、故に、その生歿年等を誤っていることは、既に指摘した¹⁵⁾。

高弁伝記を記す際にも、その態度に変化は見出せない。多くの参考資料を目にしなが、それらを精査することはなく、最も、伝記を構成しやすい本に多く依拠している。それが、明恵の場合には、「版本」であった。

補注

- (1) 田中著「明恵」（人物叢書。吉川弘文館。一九六一年）。
- (2) 奥田「解説」『明恵上人資料 第一』（高山寺資料叢書 第一冊。東京大学出版会。一九七二年）。
- (3) 平野著「第十一章 『明恵上人行状』の系統と成立」『明恵 和歌と仏教の相克』（笠間書院。二〇〇一年）。
- (4) 久保田淳「解説」『明恵上人集』（岩波文庫。一九八一年）。

(5) 浅野「明恵上人と貞慶上人―説話の混淆・個性の

問題等について―」【明恵讃仰】第十八号（一九八七年一〇月）。

(6) この説話については、山崎淳「明恵上人行状」における引用説話について―明恵伝記形成に関する一試論―【中世文学】第四十四号（一九九九年五月）に詳述されている。

(7) 「元亨釈書」と『漢文行状』の関係については、野村「元亨釈書」と『高山寺明恵上人行状』―「元亨釈書」が省略した記事を中心に―【日本文学】第五十五卷第二号（二〇〇六年二月）で論じた。

(8) 僧侶の最初の学問が「俱舎頌」であったこと、また、明恵の最初の著述が「俱舎講式」であったことは、拙著「明恵作『俱舎講略式』試論―解説と資料紹介」【明恵上人の研究】（和泉書院。二〇〇二年）で論じた。

(9) 築島裕「醍醐寺蔵本『伝法灌頂師資相承血脉』」【研究紀要】（醍醐寺文化財研究所）第一号（一九七八年十一月）。「解題」も参照。

(10) 「醍醐寺新要録」（法蔵館）の索引には「尊実」の項なし。

(11) 「明恵上人資料第二」（高山寺資料叢書 第七冊。東京大学出版会。一九七八年）「明恵上人関係血脉集」を参照。師蛮も「本朝高僧伝」釈景雅伝に「高弁。聖詮。慶宗。出自其門。」（『大仏全』一〇二・二〇〇頁下）と記している。

(12) 明恵と師景雅・聖詮の関わりと学問については、前川健一「景雅・聖詮の華嚴学と明恵」【印度学仏教学研究】第四十八卷第二号（二〇〇〇年三月。後、著書「明恵の思想史的研究―思想構造と諸実践の展開―」（法蔵館。二〇一二年）再録）に詳しい。

(13) 伝記系に記される建礼門院授戒説話については、田中久夫「『禅宗法語』所載の「明恵上人伝記」の抄録」【金沢文庫研究】第一五卷第二号（一九六九年一二月。後、著書『鎌倉仏教雑考』（思文閣出版。一九八二年）再録）が詳しく、建礼門院は「極めてあやしく」、式乾門院の「可能性がより多い」とする。

(14) 明恵と貞慶の説話については、補注(5)の他に、筒井早苗「春日明神と貞慶・明恵」【説話文学研究】第三十四号（一九九七年五月）、平野多恵「『沙石集』

明恵関連説話の情報源―巻一「慈悲と智とある人を神明も貴び給ふ事」をめぐって―」「説話の界域」(笠間書院。二〇〇六年。後、著書「明恵和歌と仏教の相克」(笠間書院。二〇一一年)再録)、野村「解脱上人と明恵上人―「太郎次郎説話」と「春日大明神御託宣記」―」「別府大学短期大学部紀要」第廿九号(二〇一〇年三月)、同「解脱上人と明恵上人―「高山寺明恵上人行状」に描かれる解脱上人―」「別府大学国語国文学」第五十二号(二〇〇年十二月)、同「解脱上人と明恵上人―興福寺藏「梅尾明恵上人伝」上に見られる解脱上人説話―」「文藝論叢」第七十五号(二〇一〇年三月)等がある。

(15) 野村「仁和寺理智院隆澄略伝―生歿年・著書・書写典籍を中心に―」「別府大学国語国文学」第五十二号(二〇一〇年十二月)。

引用は次の典籍より行った

・明恵伝記類は、注記なき場合は全て、「明恵上人資料 第一」(高山寺資料叢書 第一冊。東京大学

出版会)。「二代要記」(改訂 史籍集覧)。「如是院年代記」(新校群書類従)。「元亨釈書」・「百鍊抄」(新訂増補 国史大系(吉川弘文館))。「梅尾明恵上人伝記」(版本)。「明恵上人集」。岩波文庫)。「血脈類集記」(真言宗全書第三十九巻)。「仁和寺諸院家記」(「仁和寺史料」寺誌編一(奈良国立文化財研究所))。「吉記」(増補 史料大成)。「明月記」(国書刊行会)。「東大寺円照上人行状」(続々群書類従)。